

巻頭言

森川幾太郎先生が、会長を辞する希望を示され、参会の先生方によって承認されたことを受けた会長選任で、今までの副会長職から会長職へととなりました。会員の皆様、よろしくお願いいたします。

私は 1991 年福島大学に就職して以来、東北数学教育学会、及び、夏季研究会の前身の基礎研の会員になって 23 年がたちました。その頃からできる限り参加し、たまには発表して、東北の数学教育に何かしらの貢献ができればと考えていました。一方、この間、東北地区の教員養成学部の変化はめまぐるしく時代に翻弄されてきました。そうした中で、当然、教員の出入りはありましたが、新たに東北地区に赴任された数学教育を担当する先生方が、(東北地区に根を下ろして、かつ、東北地区の子どもたちに根ざした教育を構想していると私は考えているのですが、)本学会に目を向けていただけないということが残念で仕方がありません。数学教育研究の動向や指針を、主として外に求めている時代は 20 世紀末で終わりになったのではないのでしょうか。本学会元会長の湊三郎先生の翻訳書でも紹介されていたように、21 世紀にかけて日本の授業研究の大切さが広く海外の研究者や実践家に注目されていることは周知のことではないのでしょうか。21 世紀は海外の数学教育も参考にしつつも、日本の子どもや文化環境等に根ざした数学教育を構築する世紀となるのではないのでしょうか。

2011 年の 3 月を機に、東北地方は、この地から日本を世界を、そして人間のあり方を変えていく原点として立ち戻る所になったのだと考えます。そして、算数数学教育においても、本東北数学教育学会は、東北に足場をおいて射程は世界にまで広がった実践や研究をたとえ地道なものであっても展開していく原点として機能できたらと会長としてはひそかに考えているということをこの場で公表したいと思います。趣旨に賛同いただける方は、会長の姿勢や方向のゆらぎがないか目を光らせつつも、やさしく見守っていただければ幸いです。

二人の副会長の先生方も、どしどしご意見をください。

栗原秀幸 (福島大学人間発達文化学類)